

病院だより No.50

『ナースコールの進化～予測と不測～』

外来や病棟において、患者さんが看護師を呼ぶ手段として古くから「ナースコール」が使われている。いつ頃からナースコールが登場したのかは知らない。最近は飲食店でも店員さんと呼ぶ際にも「ナースコール」のような物が設置されている。当院のナースコールは現在の病院が建てられた時のもので、かなり古いタイプのものといえる。現在のナースコールは進化し単に看護師を「コール」するだけではなく、様々な機能を兼ね備えている。種類によっては患者さんが用件を選択して該当するボタンを押す。あらかじめ要件に対して優先順位を徹底しておくと、ナースコールが優先順位を判断し通知順序や表示の大きさ、あるいは誰に通知するかを判断することができる。看護師もナースコールの「用件」がわかることにより、優先度別にナースコールの効率的な対応ができる。またナースコールと電子カルテシステムが連動すると院内情報の転記が不要になり、患者さんの氏名の表示だけではなく感染予防、転倒防止、

安静度、その日のスケジュールなどと連動して活用することができる。当院のものはベッドからの転倒や転落防止のための離床センサー（床に足を降ろすとコールが鳴る、寝衣に付けたセンサーが起き上がろうとし外れた時にコールが鳴る）と連動する。またPHSと連動しナースステーションだけではなく病棟の他の場所でもコールを受けることができるようになっていく。しかし、どこでもコールが

受け取れる分、看護師の「業務中断」をもたらすものになっているのではないかと考えた。あの調査によるとナースコールは4分に1回という頻度であり、頻繁な業務中断はスタッフの労働環境として不適切ではないかと思える。ナースコールを使用する患者さんがあらかじめ画面に表示された用件（痛い、眠れない、食事終わった、トイレ等）を選択してコールしてもらうという考えは患者さんのニーズの

「予測」に基づいている。しかしそのような機能はないので、ナースコールが鳴るとスタッフは「208号の〇〇さん、トイレが終わったのかな」「痛み止めの欲しいのかな」「点滴が終わりそうかな」などと判断する。それで病室を訪れる前に必要な物品を準備していく。優れたスタッフの「予測機能」である。しかし、更に優れたスタッフは、患者さんがコールする前に予測して対応しておくことができる。スタッフが予測に基づくケアを行っていれば、ナースコールの回数は激減する。患者さんがナースコールを押すのはスタッフが予測できなかったニーズ「不測」であったということ。「予測」と「不測」と考えると面白い。面白いと言うとスタッフに叱られるかもしれないが、ナースコールは業務中断をもたらすものではなく、個々のスタッフの力量を表すということでもあると気付いた。

（文責…看護師 佐々木千代子）

